

宇匠会報

第 46 号
平成 23 年 5 月 15 日



風評

●—— 荒木 邦生

今回の東北、関東大震災は日本にとって大変なダメージを与えるものとなった。3月11日からテレビも震災関連のニュースを毎日放送しており、地震や津波の被害については明確になってきたし、復興支援も徐々に始まり今後も進むであろう。

しかし原発事故の問題は、今後どうなるかわからない。事態が悪化すれば今回の地震と津波による被害をはるかに超える被害につながる可能性がある、と言っている者がいる。東京電力や政府の会見を聴いても、人々に不安を与えたくない一心のように見える。

おそらく風評によりパニックになることを恐れているからであろうが、私の高校の同級生であり、ある大学の教授（原子・アイソトープ専門）は東京からベトナムを連れて帰ってきている。学生たちにもメールで授業を当分中止して、西日本に実家がある学生は実家に避難するように指導している。彼によればテレビに出てくる学者たちは、悪いことをあまり言おうとしないようである。

その同級生教授からのメールによると「ただちに健康に影響がない」と皆が口をそろえて言っているが、この言葉は裏を返せば「ただちに病気になることは無いが、中長期的には病気になる可能性が高まる」の後半の部分を省いているらしい。放射線による外部被曝よりも、放射性物質が体内に入ってから内部被曝が問題であり、目に見えない物質が知らず知らずのうちに一定量体内に入れば、将来白血病や甲状腺癌になる確立が非常に高まるらしい。

「風評」とは「世間の評判やとりざた」であるが、私が持っている不安や、同級生教授が言っていることが風評であれば良いが、もし逆であれば、政府や東電や原子力保安員、御用学者たちが言っていることが逆「風評」になり、それによる風評被害は人々をパニックに導く程度のことではなく、人々の健康を直接的に害する甚大な風評被害になる。この文章が会報に掲載される頃には、この話が風評になっていることを願っている。

計画停電下での診療の対処法

●—— 村上 茂樹

東北・東日本大震災による原子力発電の危機管理が問題となり、九州でも原子力発電所の運転再開延期により、電力需要が著増する今夏の計画停電実施の可能性が懸念されている。しかし、計画停電が実施される場合、その時間帯を潔く休診にすれば済むという単純な問題では無いのは周知の事実である。

当然ながら他科と同時に、眼科診療においても手術や光凝固治療は勿論出来なくなるだけでなく、消毒・滅菌業務にも大きな支障とリスクをきたし、外来診療も最低限のレベルでしか行えなくなる。このような経緯から関東地区の同業の医師からの情報や教示により、計画停電時の外来の診療についての対処法を考案してみた。

A 計画停電時に休診する場合

①計画停電が午前もしくは午後の診察にかかる場合には半日単位で休診する。②計画停電の予定がある場合、あらかじめ医院入口や受付に掲示を出し、受付時にも計画停電の可能性を話し、計画停電開始次第診察を終了することを了解頂いた上で、待たれる患者さんについては診察を受け付ける。③計画停電が予定された場合、基本的にはその時間帯を休診と案内をした上で医師ならびにスタッフは待機し、計画停電が回避された場合には診療を実施する。

B 計画停電時に診療を行う場合

①計画停電中は、薬剤処方を中心とした診療で対処し、レセコンなどは使えないので会計は手計算とする。②計画停電中に外来診療を行う場合は、手持ち細線灯顕微鏡や直像眼底鏡等での最低限での医療器具のみで診察を行う。さらに、小型自家発電装置がある医院の場合でも、レセコンや薬剤処方箋の発行だけでも行えるようにし、もし余力があれば最小限の器械だけ稼働させながら、他は前述した充電できる最小限の手持ちの器具のみで最低レベルの診療で対処せざるを得ないようである。

また、地震時を想定した患者さんとスタッフの避難訓練の実施も直近に必須である。さらに憂慮されるべきは、大震災後の税収著減を補うための増税と景気のさらなる長期の低迷悪化による税収減と震災復興費等の支出の著増により、健康保険においても70歳から75歳未満の高齢受給者の1割負担の据え置きが解除され、来年度以降、本則通り2割負担とされるなどの患者負担増や保険点数の切り下げの可能性も指摘されている。

この様な厳しい医療情勢においても日々創意工夫しながらスタッフと共に患者さんに笑顔で気持ち良い診療を続けることが出来るよう微力ながら努力を続けていく所存である。



ふるさと

●—— 山本 敏廣

東北地方三陸沖地震で起こった大津波はまるで映画のワンシーンを見るかのようなだった。波はあつという間に車、家、畑を飲み込んでゆき、一瞬のうちに多くの人々が今まで営々と築き上げてきた財産、人の絆、そして思い出の詰った風景を奪い去った。彼らの生まれ育った町は見る影もなく変貌し、幼いころの思い出は泡と共に消えていった。津波が去った後の町は瓦礫の山となり、人々はふる里を失ってしまった。

私は父の仕事の関係で川崎町という筑豊の炭鉱町の自宅で生まれた。団地の中央には広場と大きな浴場があり、それを取り囲むように何軒も住宅が建っていた。夜勤明けの炭坑夫が炭で汚れた体を洗うため、浴場は朝から開いていた。広場は子供たちの遊び場で、夕暮れ時まで賑わっていた。夏には盆踊り、冬には餅つき大会と住民総出